



郷里の雨錫寺(重文)に建つ十一面観世音菩薩像
(昭和 58 年八月建立・施主：碩峯・阪神石材施工)

岩屋山
観音たより

発行所：和歌山県
海草郡下津町橋本一〇六五
福勝寺内

電話 (073) 4941031
編集人：本多碩峯

観世音 天にとどけと

集まりし

へんぼん
翩翩として

御空にと舞う

碩峯作

真理の花たば



無明の酒に酔う

弘法大師講本部・四国六番安楽寺
住職・畠田秀峰師書

人生は一度きりの短い人生なのに
世間の人は酒によっている時のように
無駄に時間を過ごしている

近年の世相に想うこと

国際政治 国内政治そして経済界、
あるいは一般社会に異常と思える悲しい
現象が見え隠れする。

和を以って貴しとなす

最近よく拝見することは、「ワークシェアリング」があります。このことばの意味することは、当に聖徳太子の十七条憲法・第一条 和を以て貴しとなすの精神そのものだと思いたい。すなわち第一条の意味するところは「仲良くする」「こころであり、お互いに辛抱し合うこと」を意味することによって、「ワークシェアリング(分かち合い)」の本質を理解できる。

明日の装いを提案します!

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 **マスメン**

代表取締役 増田都司夫

本社

〒640-8376 和歌山市新中通 2 丁目 8

TEL (073)424-4466(代表) FAX (073)436-6508

豊かなまちづくりに参加します!

株式会社 **田淵建築設計事務所**

代表取締役木田耕藏

本社

〒640-8287 和歌山市築港 4 丁目 2-1

TEL(073)431-0261(代表) FAX(073)431-3898

オランダ国をはじめヨーロッパで成功されている「ビジネスシステム」ですが、わが日本国では遠くをさかのぼること千五百年前わが国の建国の父・聖徳太子の十七条憲法第一条に謳(うた)われているのです。

聖徳太子出現以前はわが国では氏神さまといつ神々(多神)を敬つ生活形態を通過して、地域(生活共同体)の民をまとめて行くといつ宗教がありました。そのような社会形態にさらに、個や集団の幸せの実現の宗教は仏教であることが示したのが聖徳太子であります。奈良時代や平安時代は国を治める皇族や貴族を中心とした仏教の中で空海が現れ、満濃池の修復や綜藝種智院といつ学校を開かれたましたが、鎌倉時代になって法然上人が出てきて、民衆一人一人のものとして仏教が民衆に取り込まれてゆきま

す。その後、親鸞聖人、道元禪師とかが日蓮上人が現れこの人々たちによる大活躍がはじまり今日に至るのです。
私たちが日本の仏教の根本にある考え方は、実は聖徳太子の十七条憲法・第一条「和を以つて貴しとなす」につきるといって過言でない。私たちに何が起(こ)つても家庭で、地域で、職場で自治体で国家レベルで「和を以つて貴しとなす」の精神を生かすことが大変重要なことだから認(こ)る必要がありま

す。を「和を以つて貴しとなす」の精神で再構築する必要があると考える。すなわち大量の失業を出すデフレになり、現業の状態を「辛抱しお合同」場目によってはそれによる人件費の削減分の一部を保険等の名目で人件費削減分を補助する方法とか、・・・、長年築き上げた経験と技術を必要に心し生かせる姿こそ、子供たちへ夢を託す社会となつて

自然観と生命観

人間の精力が物欲にかたより、その結果物質文化の輝かしい世代となつた。それで人間社会は幸福になつたかといつて、それでない。国際的テロ行為、内戦紛争、貧困、地球温暖化による砂漠化等、国内的には犯罪経済犯、青少年犯、巨悪犯、狂人による殺人、離婚、自殺、ホームレスの増加、倒産、失業者の増加等今や山積してあります。それに医学の飛躍的發展の中にも科学では解決できない病魔や老化による非痛な苦しみの声が止まな

い。さらに老人や障害者への福祉や地域へのボランティアなどが十分だろうか。
昔は仏教は「個人」としての信仰、集団としての地域社会」と密着発展してきたのが神社信仰であった。
山岳宗教のなごりが例えば西国二十ヶ所巡拝、四国八十八ヶ所巡拝、神道では皇室の熊野古道による熊野三山(本宮・熊野速玉神社・那智山)参拝、伊勢神宮参拝、徳川將軍による日光東照宮参拝などあります。仏教は単なる思想や哲(てい)学ではなく宗教であるといつてもあ

まはしていません。
真理を探究するだけでなく、それを身につけ、世の苦悩を超越した安らぎの境地に身を實際に住するといつことが非常に大切なことですが、現在の私たちはその真理を身につけるために修行が必要ですが、このことを考える前に理解することが重要なことがあります。

奈良時代の仏教は普通、学問仏教とばれば寺院が一大仏教大学をなし僧は学問に専念していたといわれています。
聖徳太子は在家の信者らしく、「法華經は山に入って静かに座禅すべき」ことを説いているにもかかわらず、教を弘めるたには山へ入つてはならない、法華義疏安樂行品」と述べているそうです。

奈良時代の山岳修行

ところが、実際に山へ入つた修行者がかなりいました。吉野山へ入つた僧の道(どう)せん)や元興寺の僧であった神(かみ)など(ご)の祖といわれる役行者小角(せきかく)えんの(ご)きょう)やあまの毛山の修行者の一人です。

ここで当地の語り部 松上千恵さんの『役小角熊野に行く』を次に紹介しよう。発行：わかやま絵本本の会、役小角(えん)のおつね)は、今から千三百年ほど前大和(奈良県)の茅原村に生まれた。生まれたときからふしぎな子だった。すくなく言葉をしやべつたので、おかあさんは気味悪くて、小角(おつね)を

山に捨てた。けれども、あかちゃんの小角が、山のけものに育てられているのを見て、また家に連れかえり、育てることにした。小角は小さいころから石を積んだり、草で鳥居を作つたり、

地面に仏さまを表わすふしぎな字を書いてよくおがんだ。大きくなった小角は、ある日、遠くにふしぎな光を見つけた。それをめだして歩いていくと、箕面(大阪府)にいた、おかあさんに会つて別れをうけ、熊野に向かった。箕面の滝にたれて千日間の修行をした。このとき出会つた仙人から、空飛ぶ術も習つた。

小角は、旅のお坊さんから「熊野」の話も聞いた。熊野は、荒々しい神さまたちのこもる国だといつた。

たまになく行きたくなつた小角は、おかあさんに会つて別れをうけ、熊野に向かった。紀伊国(和歌山県)に入ることになると、川の岸に血が流れていた。

ふしぎに思った小角は、くしゃくのじゅもん(呪文)をとなえた。「イリ、ミリ、チリ、キリ.....」

「ブチ、グチ、グツチ、ムチ.....」がすると天から声がして、「この川の氷を割つて、水で体を清めなさい。そうすれば血も消えて、川を渡ることができよう」とい

つた。「あなたは、何処の神さまですか?」



大峯山修験者の参拝 岩屋山 福勝寺本堂

とたずねると、「わたしは熊野の神だ。熊野の神はみなおそろしい顔をしているが、おそろしい顔をしているが、水につかって、心も体もきれいにしていけば、なにもおそろしいことはない。」と教えてくれた。紀ノ川を渡って、熊野の入り口、藤代にくると、川に死体が流れてきた。

通りがかりの人が「これは帝釈天といっ神さまが化けている。おまえが体を清めて人のために祈れば消えるだろ」といって、小角はまた「くじゃくのじゅもん」をとなえた。「モーリ、モーリ、ケーバツティ……」と、死体が消えて、川を渡ることができた。小角はよろこんで南へ向かって、道をはで女の人があかちゃんを産もつていた。

「くじゃくのじゅもん」をとなえたと、おばあさんは光にうつまれてどこかへ消えてしまった。んで進んでいくと、川の中に四本角のある鬼女がいて、みんなに怒がられていた。小角が、おまえはだれかとたずねると、「わたしは川のぬしであるこの川の水に使って体を清めると、この世でもあの世でものろわれないですむ。このことを修行者に教えてあげなさい」といって、川の中にかくれてしまった。

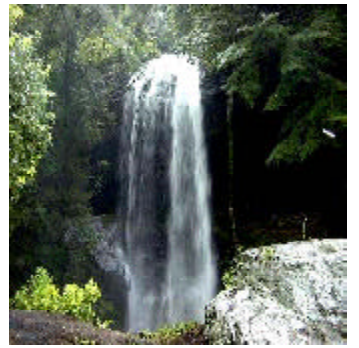
おまえはだれだと小角がたずねると、修行のお坊さんをおう鬼だといっ。こんなことはしたくないので苦しんでいゑどつかわたしたしのために祈りをしてほしいといっ。

「くじゃくのじゅもん」をとなえたと、おばあさんは光にうつまれてどこかへ消えてしまった。んで進んでいくと、川の中に四本角のある鬼女がいて、みんなに怒がられていた。小角が、おまえはだれかとたずねると、「わたしは川のぬしであるこの川の水に使って体を清めると、この世でもあの世でものろわれないですむ。このことを修行者に教えてあげなさい」といって、川の中にかくれてしまった。

「カカメー、カカカカ、ククメー、シメー、シメー」と小角がくじゃくのじゅもんをとなえたと、鬼はこれで人間を食べたなくなつたとお礼をいって、小さくなつて空に消えてしまった。

おまえはだれだと小角がたずねると、修行のお坊さんをおう鬼だといっ。こんなことはしたくないので苦しんでいゑどつかわたしたしのために祈りをほしいといっ。

役小角は役行者、役優婆塞(えんのうばそく)ともよばれ、のちには神変大菩薩(じんべんだいぼさつ)とあおがれた。山に入つて修業する「修験道」を始めた人だ。



福勝寺の裏見の滝

超人的な呪術者でよく鬼神を使役した、などと、多くの妖異譚に富むけれども、実在の人であることは史書に確かめることができる。『続日本紀』文武天皇即位三年(六九九)に、妖言、衆をまどわす、として伊豆へ流された記録がある。この小角が熊野に修法したとする話は、後世、熊野が修験の霊場となつて流布された。

都の僧院の俗化をきらつた僧侶の熊野修法、熊野庵居は奈良時代に始まり、平安初期にはかなり盛行した。『日本書紀』に、称徳天皇のころ(七六四〜七七〇)、奈良興福寺の沙門永興(えいこう)が牟婁郡熊野村にあって、海辺の人を教化した話が一話ある。この方は実在した興福寺の高僧であつたといふ。

年毎に役行者小角を慕つて熊野を通過して大峯山を経て吉野へ出る。これ「順の峰入」といふ。これとは逆に聖宝(しょうほう)は吉野から大峯山を経て熊野へ入った。これを「逆の峰入」といふ。

修験道の人峰行といわれています。

『春秋の峰入は春を順の峰入といひ本年山方聖護院之を勤む。秋を逆の峰入といひ当山方三宝院之を勤む。故に聖護院峰入の節は中辺路を通行し、三宝院峰入には大辺路を通らせ給ふ。』聖宝(八三二〜九〇九)は、京都醍醐寺開山理源大師聖宝和尚。役行者以来絶えていた修験道を再興した人と言われるから、歴史的には修験の祖ともいわれる。平安時代初期には修験者が熊野へ入つて既に行場を開いていた。浄地を求めて伝道修行者が早くも熊野へ現れています。

今日、聖護院が秋に吉野から大峯に入り大普賢岳(一七八〇m)へ行者還ぎよ(うじやがえり)へ山弥(みせん)へ仏性岳(くさね)へ(くじやく)へ釈迦岳(だいたく)へ地藏岳(ぢざい)へ涅槃岳(ねはん)へ行仙岳(ぎょうせん)へ(だけ)へ笠捨てと峰々を辿り、玉置神社を経て本宮へさつと数えて二十の高峰縦走する七泊八日の逆の峰入である。春には三井寺は那智修験を順の峰入を現在でも行っている。

私ことですが、高校時代に山に密つせられ、大峯山系に四度入山し、大学に入つて山岳部に入部したいきさつがある。

観音信仰・補墮洛渡海

那智山登り口に、補墮洛山寺がある。フダラク、あるいはホダラカは、はるか南の海にあると信じられた観音浄土、

ポータカラの音写。

ここでご紹介したい行為を修行とは云えないかもしれないが、何ともすさまじい捨身行(屍形(箱)の中に入り、小船に乗って伴船に白綱で曳かれて行き、沖に出るとその白綱を切り、南へ押し流したとつ)。

生きたままの水葬である。

長門本『平家物語』に、こつという話がある。菩提一という僧があつた。生きたまま普墮落山(ふだらくせん)を拜もうと誓いを立て、千日の行法の後、弟子理けんを一人供にし、舟を押し浮かべたが向風烈しく、もとの渚へ吹き返された。理一はさらに百日の行法を行い、唯一人舟に乗つた。舟は空舟(からぶね・軽舟)にて白布の帆懸(ほいかけ)で、順風に任せ遙かに遠ざかる。弟子理けんは聖人に捨てられ、

普墮落を拜むべからざることを悲しみ舟の隠るるまで名残惜しく慕ひた奉り、余りたへがたさに、倒れ伏し足摺(あしずり)をして喚(わめ)き悲しむを、足摺地を穿(うが)ち身は隠る計(ばかり)になりぬ。理けんが足摺して悲しんだのが、足摺岬(あしずりすみ)高知県足摺の四国遍路第三十番金剛福寺も補墮洛渡海の寺であつた。現代の視点から見れば地獄の自殺行為ですが、海上人には観音浄土への船出であつた。

『熊野年代記が貞観(じょうがん)十年(八六八)、慶龍上人には渡海を伝えていたのが最初。補墮洛山寺の『渡海年代記』に延喜十九年(九一九)二月、祐真(ゆうしん)上人が奥州の人十三人と共に渡海して以来、享保七年(一七三二)まで十八回九十五人の渡海を記録している。大阪四天王寺にも合掌して西行して海に入る(入水)信仰習慣があつた。生きながら西方阿彌陀浄土へ行く。こつという考えは心情的に日本人の受け入れやすい信仰ではなかつたか。私にはそこに広大無辺な大自然の海のかなたに幸福の国が重なる見える心地がする。

普墮落渡海が江戸時代中期に途絶えていたのは、金光坊という僧が渡海を拒んで屋

皆さんのスーパー



株式会社 みち屋 代表取締役 道畑 勇

本部 和歌山市岩橋 7 2 9 番地の 6

TEL (073) 473-4197

松島店 和歌山市加納 2 4 6 番地の 1

TEL (073) 474 - 3500

貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山 5 1 7 番地

TEL (0736) 64- 7020

形を破り島に上がったのを捕らえて無理に入水させた。当時の僧は往生の時普随落渡海を行うもの、という習慣があったよつで、住民にとってはそれは動かし難い信仰だったのでしよう。

そこには集団盲信の恐ろしさが見える。金光坊伝説以来、僧が遷化(せんげ)すると舟にのせてながすにとどまった、いう。

『平家物語』に平維盛(たいらのこれもり)入水の話がある。三位中将維盛は京へ残した妻子が気がかりで、平家の屋島の陣を密かに抜け出し、和歌山の加太に上陸。紀ノ川沿いに高野山に入った。高野で維盛の父重盛の侍であつた斎藤入道時頼を頼つて出家。熊野三山を巡拝して、浜の宮と申王子の御まへより、一葉の舟に棹(さお)さして、万里の蒼海につかひ給ふ……

維盛二十七歳、それでも妄執つきず、案内の時頼にさとされて入水する。三山巡拝の途上、維盛は先にするした結び松あたり、右代王子で湯浅宗重の子・宗光の一行七、八騎に行き逢つて

いる。当時、源氏に加担していた湯浅一族、緊張した維盛一行を見た宗光は馬をおり、深く一礼して過ぎ去つた。敵、味方と別れた湯浅宗光は、郎等に

あれはどういう人かと聞かれ、「あの方は三位の中將殿だ。近くに寄つてこ

挨拶もしたかつたが、先方にはばかり

があると思つて通つたのだ」と涙を流し、郎等ももらい泣きしたといふ。今日のテロ行為、報復戦争の世相にそんな人情など無尽もない。当時はまだ、敵味方にわかれても人情が厚く通ひ合つていたのでしよう。

とはいえ、生きながらの水葬、これは言語に絶する。凄絶(せいぜつ)である。私はその凄絶さを書きたかつたのではない。那智山が観音浄土に相對し、補墮落山の東門であつた、といつことを言いたく、こから広大無辺な南の海上はるかに、観音浄土があると信じられた……。

神武東征軍

補墮落寺に隣り合つて、一境に浜ノ宮がある。浜の宮王子とも、渚の森とも呼んだ。ここにも神武天皇頼宮跡の伝承を残している。神武東征軍は和歌の浦へ上陸した後、紀伊半島をほぼ一周しているのです。太古の船団だから水も食料も調達しなければならぬ。南紀の入り江のどこに神武伝承地があつても、おかしくはない。よもすがら沖の鈴かも羽ぶりして渚の宮に「きねつみつみつ」、は「夫木

集、仲正の歌、波の音が聞こえたのである。昔はもつと渚が近く、王子からすぐ目の前に生みが見えた印象です。浜王子は諸王子中、最も古風を残しているように思ふ。宝永年間(一七〇四-一七二〇)の津波に流失以後の再建。正面三間、入

母屋造り茅葺きの社殿は、杉の森を背

景にいつしか人を遠い昔へ誘ひ込む風情がある。

補墮落山寺は当社の供僧坊であつた。神仏習合の遺制がよく残つている点でも珍しい。摂社に地主神として丹敷戸畔(にしきとへ)を祀つている。神武軍に斬られたと紀にある神だ。熊野浦一帯にわたる首長だつたかも知れない。海南にしろした名草戸畔(なぐさとへ)といひ、熊野浦の丹敷戸畔といひ、太古の紀州の首長が神秘的な力を持つ女酋であつたらしい点に何となく邪馬台国(やまたいこく)の女王卑弥呼(ひみこ)の姿が重なつて見える。

雄大な熊野古道を通して伝道を

上皇の御幸に見る

熊野三山、本宮・速玉・那智大社のそれぞれの主神(本地佛)である本宮の家津美御子大神(けつみみこのおおかみ)、「阿弥陀如来」・速玉の速玉之男神(はや

たまのおのかみ)、「薬師如来」・那智大社の伊邪那美大神(いざなみのおおかみ)「千住観世音菩薩」です。

古い記録によると、万葉時代には紀伊国への行幸は四度行われ、一度目は斉明天皇四年(六五八)から五年かけての五度の紀伊国行幸、二度目は持統天皇四年

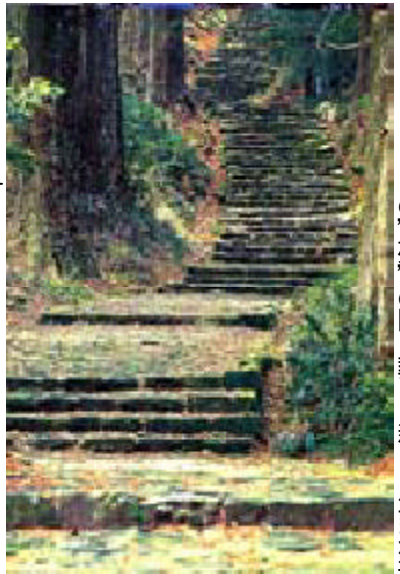
(六九〇)の持統天皇紀伊国行幸、二度目は大室元年(七〇一)の持統太上天皇・文武天皇の紀伊国行幸、四度目は神龜元年(七四四)聖武天皇紀伊国行幸です。

この世の一切の生物には生死があり、喜ひや苦しみがあつた。人生に傷つき、絶望したとき、中世の人々は雄大な大自然の熊野を心に念じ、熊野三千六百峰の果てにある熊野三山(本宮・新宮・那智大社)を自指した。都から往復一ヶ月。南海の果て、山重なり行く道はるかなりと、熊野への道は、俗塵(ぞくじん)にまみれ過去に自分をその「死」の國に葬り、新しく生まれ還り

の道であつた。

当時の熊野詣では大変であつたことは、中世の歌謡『梁塵秘抄(りょうじんひしよ)』に記されている。

熊野に参らむと 思へども 徒歩より参れば 道遠し すぐれて山きびし



那智大社へむかう大門坂

馬にて参れば苦行ならず
なごど謡われているのをみてもわか
る。

花の都を振り捨てて

くれくれ参るは臍(おぼろ)けか
且つは権現御覽せよ

青蓮(しょうれん)(眼)まなこ
を鮮かに

「くれくれ」といふは、難渋難儀(な
んじゅうなんぎ・悪路に困難をきわ
め、非常にに難しい)の意味です。熊
野は、それほど遠くけわしい道の彼方
にあった。

熊野へは京の下鳥羽(しもとば)か
ら船に乗って淀川をくだり、現在の大
阪市天満橋の西方に上陸(こ)を南に行
くと熊の街道の起点、窪津王子(くぼ
つおじ)。

この道をここから一路、和泉の国を
南下、紀ノ川を渡り、一の鳥、藤白神
社を抜け藤代坂をのぼり、熊野へと歩
む。

正史の記録

「行幸出発前年の、斉明天皇三年(六
五七)九月の条に、次のようなことが
記されている。

「有間皇子(ありまのみこ)は、大変
思慮深い智者であつて、狂人をよそ
おつていらつしやう。そこで牟婁温
湯(むろつゆ)に転地療養に行く(

りして、おでかけになり、その土地をたたえ
て、「この素晴らしい地を見ましたら、日
の病がすっかり良くなつてしまいまし
た。」とおつしやう。

このことをお聞きになつた天皇は、お喜
びになつて、自分もその牟婁湯場、現在の白
浜温泉・崎の湯へ行ってみたいものだお
思ひになつた」と。

このことが翌年の天皇紀伊国行幸実行の
主たる動機となつたかどつかは分らない
が、有間皇子の発言が、斉明天皇の目を紀伊
国へ向かせたことを知ることができる。
さらに、「『書記』はこれに続いて、「天皇
が出発に際して、前年五月八歳で天逝(よ
せい)・年が若くて死ぬこと)した孫の建王
(たけるのみこ)のことを思い出し、痛み悲
しまれた」と記している。

天皇にとつては、紀伊国へ旅すること
この愛孫を失つた悲しみを癒し、心のみた
いと、思う気持ちもあつたであろう。

が、現実の世界はもつと厳しい進展をみ
せていた。この行幸中にいわゆる有間皇子
事件がおきたのである。

この重く、あく頼事件について詳しくは
この紙面で紹介できませんが、有間皇子が
熊野からの帰り藤白神社近くで暗殺される。

「この斉明四年の行幸は、紀南の明る
おだやかな海を楽しんでばかりいられない
ような事件が起き、また愛孫の死という悲
しい思いを引きずつてのたびであつた。」
(村瀬憲夫著・万葉の歌より)

熊野二山が世に広く名が知られるようになった
のが、上皇たちによつて行われた熊野詣からで
す。それは、白河上皇の熊野御幸(じゆん)(一
〇九〇)から本格化する。

白河上皇の九度 (一〇九〇)
鳥羽上皇の二十一度(一一二五・五)
後白河上皇の三十四度(一一六〇・九〇)
後鳥羽上皇の二十八度(一二九六・一二二二)

と頻繁なかいそつであつた。この平安時代か
ら鎌倉初期にかけては、上皇たちばかりでな
く、貴族や女院たちこそつて熊野詣をしてい
る。それ以後庶民の熊野詣が現れる。
熊野古道は人類の潜在意識の顕れ!
熊野古道は仏道に通じる道であると思
います。紀州熊野の風景は宇宙を表現し、
人間の無限の生命(いのち)の顕れです。

熊野古道を語る前に紀伊国を訪れ、あ
るいは紀伊国に関心をもつ万葉人たちは
なにか得体の知れない一種無気味な、し
かし好奇心の駆られる、神話の紀伊国の
ことを、心の奥底では意識していたであ
らう。

だが、「万葉集」の紀伊国の世界は、や
はり神話の紀伊国の世界からは遠いと言
わざるを得ない。

一方紀伊国の自然界の光景は宮廷の庭
園風景であつたり、庶民の盆栽が創り出
す芸術であつたりしているが、むしろ紀
伊国の自然が創り出す風景が宮廷や寺院
の庭園であつたり、庶民の盆栽であつた
りして、生きとし生けるものの安らぎの
場となつているのであります。



有限会社
代表取締役

ミヤタケ
宮下隆博

〒640-8329
和歌山市田中町 4 - 1 1 9
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

有限 **日本メディテックス**
会社

代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054
和歌山市塩屋 5 丁目 5 番 4 3
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

戦前の日本人の思考は仏教的思考であり、農耕民族的思考であり、すなわちアナログ的思考である。

その景観と紀伊万葉の旅を通してアナログ的思考で、歴史を振り返り、歴代の天皇の紀伊行幸や我が紀伊国の育んだ明恵上人や浄土真宗の高僧蓮如上人達が庶民と共に熊野古道を歩んだ旅姿を通して現在に至る我が下津の庶民の生活を創造したい。

当時の紀伊国、万葉の旅は短期の旅であり、現代の旅に近い。しかし、現代に近いといっても、旅の期間のことであって当時の旅は、現代のように楽しいものばかりでなかった。むしろ旅は苦しいのが普通であった。けれども、紀伊万葉の旅の場合は少し事情がことなる紀伊万葉は四度の行幸時の歌が中心で旅の苦しさが基本なるも万葉の一般的な歌よりも、少し遊び心に楽しみの気分が出ている歌が多いのであります。

黒牛瀉 潮干の浦を 紅の

玉裳裾引き 行くは誰が妻

「黒牛瀉(くろごうし)がた)の潮の引いた砂浜を紅の裳の裾を引いて歩いていっているどこの人妻なんだらう」

黒牛瀉は、現在の海南港の北側に位置する海南市船尾・黒江・日方あたりをいう。現在はすっかり埋め立て、工業化が進み当時の清らかな景観とはうらはらにあまりにも悲しい光景です。

なぜならば、私たち日本国民のご先祖様たちが、日頃の生活の喜びや悲しみや苦しみを浄土の世界、熊野三山へ足を運

ぶ大自然の熊野古道を仏道として低い山並みでありながら道中は険しく厳しく苦しい道のりが人生そのものであった。都を出て淀川を船で下り今の天満橋で上がり歩きとおして藤白坂を息絶え耐えに登りきって塔下王子、振り向く光景が生まれて始めてみる廣大無辺な大海原の太平洋、名草山、和歌の浦、遠くには淡路島、現在の大阪、兵庫の山並みが見える。今までの心に残る苦ししみは一瞬にして癒された。

次号へ続く

拾い読み

仏心と親心

自然学者で無神論であったアインシュタイン博士が大正十二・三年頃日本を訪れた時の話。

博士が当時真宗の僧侶であられた近角常観ちかずみじょうかん(師を訪ねたそつです。その時、『神はあるのか、ないのか』と質問されました。これに対して近角常観師は、姥捨山(おばすてやま)の話をなさったそつです。

『ある若い男が、老母を背負って山奥に捨てに行った。老母は息子の背の上で道々、手を伸ばして木の枝を折っては捨てていった。男は老母自身帰る道しるべにするためだらう』

『日本へ来て、はじめて真の神を見ることができた』
と云って、心から喜んだといふまことにこの地上にはないところの仏陀の無限の慈悲の尊さを知らせてもらった。この一事なしには宗教はない。(大法輪昭和三十一年六月号)

と云って、その木の枝を足で蹴散らして、わからぬようにして行った。やがて山奥に着いて老母をおろし、さて立ち去ろうとした時に老母は息子に向かい、お前が帰る道がわからなといけないと思つて、木の枝を折って捨てておいたから、それをめあてにして帰りなさいと言つた。男は我が身を捨てる子のために道しるべをする親心、悪いものを悪く思わぬその限らない慈悲の心に胸つたれて夢からさめた心地が、不幸の罪を謝し、再び老母を背負つて帰つて、一生、孝養を尽くしたといふ。その無限の慈愛、親心、それを離れて神も仏もない』

と話され

奥山に枝折(しおり)々々は

誰(た)がためぞ、

親の身捨てて、帰る子のため

という歌をそえて、仏陀の無限の慈悲を高調した。これを聞いたアインシュタインは、神の愛、仏の慈悲を理論でなくてじかに身に知ることができ、

『日本へ来て、はじめて真の神を見ることができた』
と云って、心から喜んだといふまことにこの地上にはないところの仏陀の無限の慈悲の尊さを知らせてもらった。この一事なしには宗教はない。(大法輪昭和三十一年六月号)

自然との共生... やっぱり有機です!

- 有機化成・・・グアノ化成、サンミクロ化成、そだち化成
- 有機液肥・・・サンミクロ液肥、トップグリーン、パイオトップ
- 胚芽肥料・・・胚芽有機、胚芽燐酸
- 輸入肥料・・・貴陽 696・888、硝酸化成 555
- 有機ベレット・・・ペレボンF、胚芽ミックス
- 有機配合肥料・・・カンベキ 864

株式会社 倉商

大阪市西区京町堀 1 - 3 - 2 2
電話 0 6 - 6444-0289・FAX06-6444-0911

石田裕之

関西に彗星のごとく現れる

シンガーソングライター!

現役の神戸大学法学部学生

ラジオ大阪(OBC・1314)

「ミュージック・ビッグ・バン」にDJで出演

毎土曜日 PM9:30 ~

http://www.insomnia.co.jp



坊主の独り言

問われている高付加価値とは何か

二月十九日の新聞紙上で福井県永平寺町の曹洞宗永平寺と和歌山県高野町の高野山真言宗金剛峯寺が十八日「二十一世紀を人類の希望の世紀とするため、平和と共存、共栄を考える対話を始めるべきだ」とする「高野山声明」が発表された。

大変喜ばしいことです。私が仏教に縁を結んで有難く思つのは仏教は自由で創造性豊かな心を育む宗教だからです。当、高野山真言宗 福勝寺の境内には蓮如上人ゆかりのお堂・名号堂があり毎年多くの浄土真宗の檀家さんが参詣に参ります。

多行から専修へ

仏教とは瞑想とあると聞かされて申し上げましたが、一般に瞑想といえは禅宗の坐禅と考えますが、天竺宗では最澄が十九歳で東大寺で受戒した後比叡山に籠って「無常観・罪業観」記しているそうです。現在でも仏教大師の廟所である比叡山の浄土院には十一年間浄土院に籠っている僧がいます。今日の比叡山中を七年間で千回歩く回鑿行 九十日間坐禅し続ける行 阿弥陀仏の周りを九十日間ゆくりと回り続ける行 坐すのと歩くのと交互に行へ行。

真言宗も同様で、真言宗の行の中心

は三密瑜伽さんみつゆがといつて真言宗では弘法大師空海が二十四歳の時の処女作『三教指帰』にあるように字間に通じていました。しかし空海は字問のみに満足せず、山修の行者となり、阿波 土佐 伊予などの山野で修行に努めましたことはあまりにも有名です。『三教指帰』には「(二二二) (ひとりの) 沙門あり、余に虚栄戒求聞持の法をしめす。その經に説く若し人法によつてこの真言一百万遍を誦すれば、即ち一切の教法の文藝諸記するの功を得」と今日でも、高野山真別処で 虚栄戒求聞持法の行が行われている。

法然(一一三三-一二二二)は「智慧第一の法然房」と言われるほど優秀だったそうです。四十二歳の時、中国の中國唐代の浄土教の善導(六三一-六八二)の『観無量寿経疏』の「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥(きょうじゅうざが)に、時節の久近(くん)を問わす、念号(ねんごう)を専らこれ(これ)を正定の業とす。彼の仏の願に順ずるが故に」といつ文によつて法然は回心を遂げたのです。この「一心」とは他に心を向けることになく、だ心を一つに集中することであり、「専ら」という意味もおなじです。ただ口で念仏を称えさせれば、それだけで救われる」といつ教えは、当時の人々にとって大きな救いとなり

ました。源平の戦いの中にあつて、武士たちも明日の命も分からない生命の救いを、当時の庶民も慮げられた生活の中で大きな救いとなり、貴族もまた法然に求めました。万人がどのような人でも行える行であり、口で称えることならば、貧窮の者でも、愚鈍の者でも、少聞少見の者でも、破戒無戒の者でも容易に出来る行であり、万人に通ずる行を阿弥陀仏の救いの行とした。

法然の弟子親鸞もまた名号念仏の一行に徹したことはいつまでもありません。

当寺、福勝寺蓮如上人ゆかりの物語は次号でご案内します。

法然よりも早く、高野山でも覚鑿上人(一〇九五-)によつて念仏の一行の称える声に全身が響いたと言われています。

道元(一一〇〇-一二五三)は「人間は本来非常にすぐれた性質をもっており、肉体的にも非常に恵まれた素質をもっている」といつ天台教学に対し、道元はそのようにすぐれているならば、なぜ修行するひつよがあるのかと疑問を抱き、師を求めて中国に留学した。留学によつて、凡夫は仏になるために行つたのではなく、仏が仏の行を行つたものであるとの解決を得た。

日蓮(一二三三-一二八二)小乗より大乘、諸經より法華經、迹門(しゃくもん)(現実の釈迦の説法)より本門(釈迦の本質をなす永遠の仏の法)がすぐれ、法華經の本門の文章の表面でなく文章の底にある観心(心を観する)がすぐれている本門寿量品の観心の一念三千(ひと)の思い、一念の中にすべての法が具わつ

ているはずべて、南無妙法蓮華經の五字に包まれていると考える。

このように日本の仏教がその後宗教的要素が加わつて発展 今日に至っていることを理解した上で、次号から真言瞑想法による自心の探求を通して高付加価値経営に私見を展開したい。

(参照：一九九八年教育テレビ「心の時代」田村晃祐著・他)

短歌

信貴山の

階段を登りて

行くほごに

煩惱の

身を虎が迎える

(はりのこ虎)

谷沢佐規子作

凡夫の身を自覚し精進する心が観える。

編集後記

衛星放送の朝のドラマ「ほんまもん」と「いどん」を朝食後の日課として見ている。空海の五大要素・熊野古道・精進料理を通して自己の心の探求を観る。

若かりし日、戦後の舞鶴海軍工廠跡の造船所で防衛庁向け、兵器、艦艇の開発に従事した経験があり、当時を重ねながら鑑賞する。厳しさの中にも人情がある。